

もうスイング(ティルト)アオリで迷わない

～リンホフ テヒニカを中心に～

要旨 大判写真の特徴であるアオリはフィルム面とレンズの光軸との垂直性を変化させて遠近感(パースペクティブ)の補正やピントの合う範囲の拡大(又は限定)等の目的で行なわれます。私達の被写体でポピュラーな風景写真では最適と思われる仮想平面を遠点と近点にピントが合うようにティルト(スイング)角度を決定して撮影しますこれをビューカメラの雄ジナーでは創始者コッホ氏の実用的経験から遠点、近点のピントガラス上での間隔を(4x5) 70mmに設定して、遠点と近点のピントのずれをスケール上で読取って、仮想平面のスイング角(ティルト角)を決める方法を提唱しております。

- ①これを一般的な大判カメラで利用するスケールを作りました。
- ②リンホフ テヒニカ用にティルト角(スイング角)を決める定規を作りました。
- ③さらに仮想平面の遠点、近点を5x7, 8x10判や被写体合わせて変更する際のためのグラフを作りました。

以上について原理と利用法を説明します。

§1 ジナー式ティルト角(スイング角)スケールの使用について

～仮想平面の近点-遠点のピントガラス上の間隔が70mmの場合～

左図の如くピントガラスに中心点から35mm位置に井型の線をダーマトグラフ鉛筆で記入します。

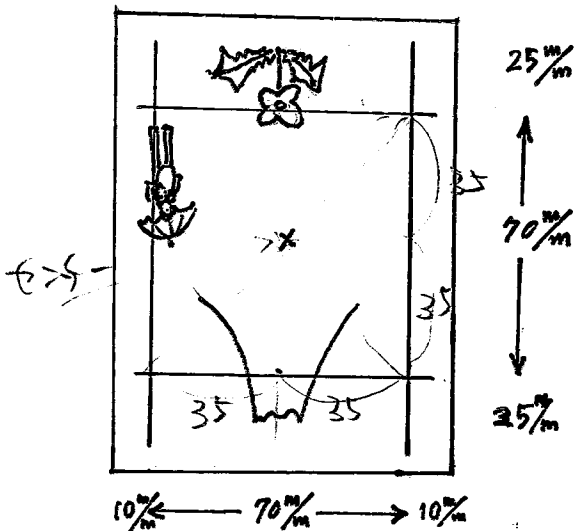
この上下(左右)2本の線が仮想平面の遠点と近点の位置になります。

角度スケールをテヒニカのスケールスライド上に貼付します。

下側の線で合焦しスケールを0に合わせます次に上側の線で合焦し、スケール上の角度がティルト角(スイング角)です。

遠点があれば+、下があれば-表示です+は後部アオリで上側開き、-は下側開き、となります。

スイングが必要な場合も同様にして角度を読取ります。



まずピントガラスの右側の線で合焦してスケールを0に合わせ、左側の線で合焦して角度スケールでスイング角を読取ります。+ならば時計回り、-なら反時計回りです。

ティルト(スイング)後、遠点・近点の合焦を微調整が必要(仮想→実平面)のとき、ティルトによる構図に空白がでるときは前枠で前枠のライズに合わせよう(セッティングには影響ない)。